

文法現象における類像性の反映

村 椿 慎 一

0 はじめに

Saussure 以来、言語記号の恣意性 (arbitrariness) のみが前面に押し出され、類像性 (iconicity) については周辺的にしか扱われてこなかった。¹⁾ 確かに、単語のレベルでの音と意味との対応のような点的な関係に関する限り、恣意的なものが多く、類像性の反映されているものはせいぜいオノマトピアと呼ばれているものに限られるであろう。しかしながら、文法レベルにおいてみられるような複数の言語記号間の関係は、完全に恣意的なものではなく、対応する概念間の関係を類像的に反映していると言えるものも少なくない。本稿では、文法現象における類像性の反映を見ることによって、文法が単なる規則の集合ではなく、人間の概念化を反映したものであることを示したい。これまで、主流をなしてきた研究の中では、予測可能性のあるものが規則として認められ、規則に従わない現象は単に恣意的であるとして切り捨てられてきた傾向があるが、類像性に基づいた文法分析により、それらに対する自然な説明を与えることが可能になるであろう。²⁾

1 類 像 性

具体的な文法現象を分析に入る前に、類像性について概略しておく。

類像とは Pierce が記号と対象の関係について三分したうちのひとつとして位置づけられる。Pierce は記号と対象の関係の種類を類像 (icon)、指標 (index)、象徴 (symbol) の三つに分類した。簡単にいえば、記号と対象との関係が、位相的な類似性・共通性に基づくものが類像、隣接性に基づくものが指標、恣意的であるのが象徴である。ここで注意したいのは、このような三分は絶対的なもの

ではないことである。すなわち、類像性と恣意性との関係は相対的なものである。類像性と恣意性は二者択一的な、対立的なものではなく、むしろ、対極にあるものでありその間は連続的であると考えらるべきである。

Pierce は、さらに類像に対しても形象 (image), 図式 (diagram), 隠喩 (metaphor) に三分している。形象とは、記号と対象との単体的な類似性によるものであり、絵や写真などが含まれるが、言語では、オノマトピアに見られる。図式的類像性は、概念と記号との間に構造的な対応関係みられるものである。この関係には、例えば、線条性、対称性 (又は、非対称性) や遠近性といったものがある。すなわち、形式の生起の順序は、出来事の生起の順序を表したものであり、形式に見られる (非) 対称性は概念上の (非) 対称性を反映したものであり、形式上の相対的な遠さは、概念上の遠さの反映であるということである。隠喩的類像性は、ある概念の他の概念への拡張や写像にみられるものである。言い換えれば、隠喩とはある概念を別の概念を通して理解することである。

本稿では、文法現象に反映されている次の4つの図式的類像性について扱う。線条性、遠近性、同型性、連続性である。以下では、次の4つの点について例証していく。

- ・言語の構造は——ある程度まで——直接的に経験の構造を反映する。
- ・言語表現における遠近性は概念上の遠近性を反映する。
- ・言語記号における同型性は——何らかの点で——同じ概念を記号化する。
- ・言語表現における連続性はイメージの連続性を表す。

2 経験と言語表現の類像性

本節では、大堀 (1991 : 96) が線条的類像性 (linear iconicity) とよんでいる、言語表現と経験の構造との直接的な反映の例をみていく。

そのような例として、(1)を挙げることができよう。

- (1)(a) Veni, vedi, vici. (Julius Caesar)
 (b) Woke up, got out of bed, dragged a comb across my head. (The Beatles)

- (c) Bill is supposed to leave Tokyo tonight, meet the staffs in London, and attend the conference.

(1)ではいずれの文もそれぞれ3つの出来事を表現している。ここで注意したいのは、3つの出来事を表す表現の線条的な順序関係が、出来事の生起の順序を反映していることである。このことから、言語表現が経験の構造を反映しているといえよう。もっとも、この例だけでは経験が言語表現の配列に関して重要な影響を与えているとはいえないかもしれない。しかし、例えば(1)(c)の3つの出来事を表す表現の配列を変えれば、出来事の生起の順序の解釈は異なるものになるであろう。

- (1)(c)' Bill is supposed to attend the conference, leave Tokyo tonight and meet the staffs in London.

- (c)'' Bill is supposed to leave Tokyo tonight ,attend the conference and meet the staffs in London.

次のように、出来事の生起の順序が明確な場合は、その順序と言語表現の配列の順序が対応しなければ、容認度が落ちるものとなったり、理解しにくいものになる。

- (2)(a) ?長篠の合戦では、織田・徳川の連合軍が武田の騎馬軍団を打ち破りました。一方、こちらの寺は、徳川家安が三方ヶ原の合戦で武田信玄に負けたときに逃げ込んだと言われているところです。

- (b) ?戦後に行われたビッグ・イベントと言えば、やはり、筑波の科学博、大阪万博、東京オリンピックですね。

このことから、言語表現は経験の構造をある程度直接的に反映しており、また、そのような対応が言語表現の理解に欠かせないと言える。

3 言語表現における遠近性

本節では、言語表現における遠近関係が概念における遠近関係の反映であるこ

とを例証する。

概念における遠近性というのは、例えば(3)や(4)においては経験の直接性を意味する概念である。(cf. 池上1991: 57-59)

- (3)(a) I believe John honest.
 (b) I believe John *to be* honest.
 (c) I believe *that* John *is* honest.
- (4)(a) I found the chair comfortable.
 (b) I found the chair *was* comfortable.
 (c) I found *that* the chair *was* comfortable.

(3)の(a)と(c)を比べると、(c)では‘John’と‘honest’との間に‘is’が、‘John’と‘believe’との間に‘that’が介在していることから、言語表現における遠近性の差は明らかである。(a)と(c)の意味を比べると、「ジョンが正直である」と判断する基準は、(a)では直接的体験に基づいているのに対し、(c)では間接的な証拠によっているという違いがある。経験の直接性について(b)は、その中間的段階にある。(4)では、椅子の座り心地に関して、(a)は直接的体験に基づいて述べているのに対し、(c)は間接的な経験に基づいて述べており、経験の直接性に差がみられる。これらの例から、言語表現における遠近性が経験の直接性を反映していることがわかる。

- (5)(a) Jane asked them to leave.
 (b) Jane asked *that* them to leave. cf. 池上 (1991: 60)

(5)では、言語表現の遠近性に反映される概念の遠近の差は、関与の直接性を意味する。どちらの文においても、Janeが彼らに立ち去るよう求めているのであるが、(a)ではJaneが彼らに直接求めたのに対し、(b)では他の人を通じて求めたという場合も考えられ、関与の程度に差がある。

ここまでは、言語表現における遠近性が経験の直接性に対応している例をみてきたが、次に、影響の度合いとの対応について考える。

(6)(a) John hit Mary.

(b) John hit *at* Mary.

(6)において、(a)はJohnがMaryを殴ったことを意味するが、(b)はJohnがMaryに対して殴りかかったことを意味するだけであって、その結果について問うものではない。言語表現上の違いは‘at’の有無であるので、それによって生じる遠近の差がMaryに対する影響の差を反映しているといえる。このような影響の差の違いは、次の文法性の違いから明確である。

(7)(a) Mary was hit by John.

(b)* Mary was hit *at* by John.

(8)においても同様に、遠近の差が影響の度合いを反映している。(a)ではHarryがギリシャ語を習得したことを意味するのに対し、(b)はそのような意味を持つ必要はないのである。

(8)(a) I taught *Harry* Greek.

(b) I taught Greek to *Harry*. cf. Lakoff and Johnson (1980: 192)³⁾

次の例では、影響の度合いの違いが、影響の全体性として解釈される。(cf. 池上1991: 117)

(9)(a) John sprayed *the wall* with paint.

(b) John sprayed paint on *the wall*.

‘the wall’は(a)では目的語として動詞の直後におかれているが、(b)では動詞との距離は相対的に遠くなっている。ここでは、このような言語上の遠近性の差は影響の度合いの違いを反映しており、(a)は壁全体が塗料で覆われたことを意味するが、(b)はそのような意味を持つ必要はなく、塗料が付いているのは壁の一部であればよいのである。

次の(10), (11)の下線部は、神尾(1990)が間接形と呼ぶものであり経験の間接性を表している。ここで言う間接性とは、命題に対する判断の証拠性が間接的な経験に基づいているということである。

- (10) (a) このままでは優勝は無理かもしれない。
 (b) このままでは優勝は無理なのかもしれない。
 (c) このままでは優勝は無理と言ってもいいかもしれない。
- (11) (a) 予選突破は確実だと思われる。
 (b) 予選突破は確実であろうと思われる。

ここで注意したいのは、(10) では(a)よりも(b)、(b)よりも(c)のほうが間接性が高く、言語上の距離が長いということである。(11)においても同様に(a)よりも(b)のほうが言語上の距離が長く、経験の間接性も高いといえるであろう。

言語表現における相対的な遠近関係は(12)に見られるように敬語にも反映されている。

- (12) (a) 雅子さんは、高校のとき、よく授業をサボッて多摩川へ巨人軍の練習を見に行っていました。
 (b) 雅子さんには、高校時代には、時折、多摩川のグラウンドへ巨人軍の練習をご覧に行かれていたようです。
 (c) 雅子さんにおかれては、学生時代、多摩川あたりで野球チームが練習しておりましたので、そこで楽しそうにご覧になっておられるお姿をお目にかかることもございました。

上の例で、(a)から(c)へと下へ行くにつれて敬意の度合いが強くなっている。このことから敬語は、話し手と尊敬や謙譲の対象との心理的な距離が、言語表現の距離に反映されていると言えるのであろう。⁴⁷⁾

命令を表す表現においても同様のことが言える。

- (13) (a) 窓を開けろ。
 (b) 窓を開けてください。
 (c) 窓を開けてくださいませんか。
- (14) (a) Read this book.
 (b) You must read this book.

- (c) You had better read this book.
 (d) If I were you, I would read this book.

(13)と(14)のいずれにおいても、下にいくにつれて、すなわち、言語表現上の距離が長くなるにしたがって、命令の強さが弱くなり、丁寧さの度合いが強いのになっている。

以上、本節において見てきたように、言語表現における遠近性は経験の直接性や影響の全体性などといった概念上の遠近性を反映しており、その点で言語と概念との間に類像的な対応を見ることができる。⁵⁾

4 記号の同型性

本節ではBolinger (1977)の「意味と形式の一体一対応」に従って、同型性という点から形式と意味との間の類像性を示す。

はじめに、「形式が同じであれば意味も同じである」という考えに基づいて記号の同型性について例証する。

- (15) (a) 台風のために休校した。
 (b) 生徒の安全のために休校した。

(15)の「ために」は(a)では原因を、(b)では目的を表している。ここに、〈原因〉と〈目的〉との間の相同性を見ることができる。また、次の英語の例では〈目的〉と〈結果〉との間の相同的な対応がある。

- (16) (a) Talk louder *so that* I may hear you.
 (b) He overslept, *so that* he missed the train.
 (17) (a) We went there *to* meet an old friend of mine.
 (b) I awoke one morning *to* find myself famous.

以上のような〈原因〉と〈目的〉、〈目的〉と〈結果〉との間の相同性に対する説明としては、池上(1981)などによる、「場所理論」の観点からのアプローチ

が有効であろう。池上 (1981: 147) は〈原因〉, 〈目的〉, 〈結果〉を次のように整理している。

	←起点→		←到達点→
FROM X	TO \bar{X}	TO X	
〈原因〉	〈目的〉	〈結果〉	

単純にいえば、ここで 'FROM X' というのは「Xから」を、' \bar{X} ' というのは「Xでないところへ」を、'TO X' は「Xへ」を表す。〈原因〉が〈起点〉であり、〈結果〉か〈到達点〉であるということについては特に説明を要しないであろう。〈目的〉が 'TO \bar{X} ' であるというのは、現に事実でないことへの志向性を示すものであり、〈起点〉であるというのは、例えば (15) (b) において「休校にした」という事実を引き出していることを表している。上の表は〈原因〉と〈目的〉は〈起点〉という場所的概念に還元することができることを表している。また、' \bar{X} ' は負の〈到達点〉として再解釈できるので、〈目的〉と〈結果〉については〈到達点〉へと還元できるのである。したがって、ここまで見てきた相同性に対しては、「場所理論」の観点に基づいた場所的關係から論理的關係への隱喩的な拡張に動機づけを求めることができよう。

次のように分詞構文や非制限用法の關係節が幾つかの意味を持つことに対しても、同型性の観点から説明が必要であろう。⁶⁾

- (18) (a) *Weather permitting*, I will take you to the zoo. 〈假定〉
 (b) *Being very tired*, I had a good sleep. 〈理由〉
 (c) *Admitting what you say*, I still think you are wrong. 〈讓歩〉
- (19) (a) The girl, who was a best friend of mine, would not have left me. 〈假定〉
 (b) The girl, who was a best friend of mine, helped me very warmly. 〈理由〉
 (c) The girl, who was a best friend of mine, betrayed me. 〈讓歩〉

(18) における分詞句や (19) における關係節が幾つかの意味機能を持つことは、(18) (a)

～(b)では、それぞれ if, because, though によって書き換えることが可能であり、(19)でもまた(a)～(c)が、それぞれ、if, because, though のような接続詞で解釈できることから明らかであろう。すなわち、従属節が幾つかの意味機能を持つことと相関関係にあるといえる。ここで言う相関関係とは、図 (figure) としての主節に対して地 (ground) として機能することである。ここで、〈假定〉、〈理由〉、〈譲歩〉といった意味機能を、池上 (1981: 147) に従って「場所理論」的観点から整理すれば次のようになる。

<起点>		<到達点>
FROM X	TO X	TO X
<理由>	<假定>	
	<譲歩>	

〈假定〉と〈譲歩〉が〈起点〉であり 'TO X' であるとして位置づけられているのは、現に事実であることから離れて、現に事実でないことへ移ることを表すからである。〈假定〉と〈譲歩〉は池上 (1975: 446) が述べているように、基本的には意味構造は同じであって、予想される帰結が反対であるという点で異なっているのである。ここで興味深いのは、図と地の観点から考えると、地として働く分詞句や関係節が担う意味機能がいずれもで〈起点〉に還元されることである。また、〈假定〉、〈理由〉、〈譲歩〉に対する図としての意味機能はそれぞれ、〈帰結〉、〈結果〉、〈帰結〉であって、場所理論的には〈到達点〉である。これらのことから、ある種の論理的関係を場所的關係として隠喩的に理解し、その際〈起点〉を地として、〈到達点〉を図として捉えているという一般化が考えられよう。

これまで「形式が同じであれば意味も同じである」という同型性の観点から、形式と意味との類像性について見てきた。この節の残りの部分では、意味と形式の一体一への対応をさらにおしすすめ、「意味が異なれば形式も異なる」事を前提に形式的異化 (formal dissimilation) という点から、形式と意味との類像性を別の側面からみていく。(cf. 菅井 1992: 46-47)

形式が同じであれば基本的に同じ意味で用いられるという原則が実際に使用さ

れるレベルにおいても適応されると考えると、同じ形式が異なる意味で用いられることには何らかの反発が起こるとの予想される。このことは、次のような例によって確認される。

- ⑳ (a) I kissed her on the cheek.
 (b) I kissed her on the plane.
 (c) ?I kissed her on the cheek on the plane.
 (d) I kissed her cheek on the plane. cf. Quirk *et al.* (1985: 649)

- ㉑ (a) コピーをとる。
 (b) 本のカバーをとる。
 (c) コピーをとるときは本のカバーをとりなさい。
 (d) コピーをとるときは本のカバーを外しなさい。

㉑では(a), (b)がともに適確であるのに対し, (c)は容認度が低いものとなり, (d)の表現がより好まれるであろうし, ㉑でも(c)は容認不可能ではないが(d)のほうが理解しやすいであろう。これらの例から異なる意味を持つもの, すなわち, 捉えられ方の異なるものが同じ形式で表現されることが避けられているように思われる。また, 次の㉒(a)は全く文法的な文であって, さらに無限に展開していくことも可能である。しかしながら, 実際に使用されることは希であろうし, (b)のほうが明らかに理解しやすいであろう。

- ㉒ (a) ??John said Mary said Tommy said to you that Jane said this was true.
 (b) According to John, Mary said, Tommy told you Jane's words that this was true.

さらに, 英語における次のような条件節のマーキングに対しても, 形式的異化によって動機づけを与えることができる。

- ㉓ (a) If I were in your position, I would help her.
 (b) Were I in your position, I would help her.

(c) *I were in your position, I would help her.

普通、条件節は、㉓(a)のように従属接続詞“if”あるいは“unless”によってマーキングされる。このような従属接続詞が用いられないときは、(b)のように、助動詞と主語との倒置が義務的に起こる。もし、従属接続詞の使用も倒置も起きないときは、(c)に示されるように非文になる。(c)が非文になるのは、2つの節が文法的に同じ地位にはないにもかかわらず、統語的に同じ扱いを受けているからに他ならない。すなわち、条件節と帰結節がマーキングの上で異なるものとして処理されていないからである。類像性の原則からいうと、意味機能的に異なる言語単位は形式的にも異なることが要求されるのに、その形式的異化がマーキングに反映されていないからであると言っていい。この形式的異化と、本節の前半で見た同型性の観点から、言語記号と概念との間の類像的な関係を示した。

5 イメージの連続性

この第5節では「連続性」という性質を取り上げる。⁷⁾

ここでいう連続性は、おおむね“言語表現における構成素の配列順序が「心的イメージ (mental image)」における指示物 (referent) 間の概念的な遠近関係を或る程度まで忠実に反映すること”と考えていい。⁸⁾ 連続性という性質が言語表現の構築にも効果的であることは「捉えた状況 (conceived situation)」に対する主体の走査 (scanning) が線条的にならざるを得ないという言語にとって本来的な特性からも明らかであろうと思われる。以下では、言語構造が連続性を含む類像的な諸要因によって有機的に動機づけられていることを具体的な統語現象の中で示すつもりである。

ここでは、具体的に日本語における名詞的格成分の配列について考えてみたい。日本語のように比較的語順が自由であると言われる言語でさえ、類像的な要因が本来的に作用していることが観察される。例えば、次のペアでは、直感的にいうと、ほとんどの日本語話者にとって㉔(a)の方が(b)よりも“分かりやすい”と感じられるであろう。⁹⁾

④ (a) 1人の男が原始人の格好で石製の矢を洞窟から山の方に撃った。

[主体] → [様態] → [対象] → [起点] → [方位]

(b) 石製の矢を山の方に原始人の格好で1人の男が洞窟から撃った。

[対象] → [方位] → [様態] → [主体] → [起点]

このペアの違いを生じさせているものは名詞的格成分の配列順序しかないのだから、④(a)の方が(b)よりも分かりやすいと感じられるのは、(a)の方が(b)よりも配列順序において自然であるからに他ならない。また、(a)と(b)の配列順序における質的な差異が連続性の成否に基づいていることは明らかであるから、連続性という要因が意味の構築や理解にとって本質的であることも容易に理解されるだろうと思われる。¹⁰⁾

上述の例のように、一定の構造内で構成素の配列順序に複数の可能性があるとき、生成文法の枠組みでは「かきまぜ規則 (scrambling rule)」が適応されると言われる。この規則については、そもそもの存在理由を疑う批判的な見解を含めて様々な評価が与えられているが、本稿の立場から言うと、知的意味の相違を積極的に認めない限り正当に認めることはできない。形式が異なる以上、知的意味も明確に異なると言わざるを得ないからである。言い換えれば、一定の構造内であれば知的意味の相違を生じることなく語順が「自由」であるとか「恣意的」であるという分析も完全に否定されることにもなるのである。

なお、上述のような分析に異論が出るとすれば、上の④における(a)と(b)の相違が他の要因に基づくかもしれないというものであろう。例えば、配列順序の変更には強調や主題化といった機能的動機づけもあれば、文体的な動機づけも考えられる。しかし、にもかかわらず、機能的ないし文体的要因よりも類像的要因のほうが本質的であることは全く損なわれない。なぜなら、機能的・文体的変形が基本語順を前提とした2次的な操作であるのに対して、連続性を含む類像的要因が基本的な発話を支える1次的な要因として作用するからである。

最後に、連続性という特性が文法的構文の統語的な適格性にまで関わることを指摘しておきたい。英語では語順の固定が厳格であるため、構成素の並び替え(permutation)についても可能性は非常に制限されているが、一部の前置詞句

などについては全く不可能という訳ではない。しかし、その場合でも並び替えは意味構造に動機づけられており、場合によっては、通常パターンに反していても有機的な連続性によって文法的適確性が保証されることがある。

例えば、英語では、周知のように、複数の前置詞句が並んだとき後ろへ行くほど大きな単位が与えられるというのが通常のパターンである。ところが、次の (25) のように、通常と逆の意味構造をなす表現も可能である。

- (25) (a) Your copy of *Woman, Fire, and Dangerous Things* is downstairs in the study in the book case on the bottom shelf next to the *Illustrated Encyclopedia of Glottochronology*.
- (b) Lexicostatistics Museum is across the plaza, through that alley, and over the bridge.

このような現象に対して、Langacker (1993: 26–27) は“Reference-point construction”という概念の下で次のような分析を与えている：すなわち、より左の前置詞句が次の前置詞句に対して“探すべき領域 (Search Domain)”を限定していくように構造化されているというものである。通常のパターンからいうと、上の (25) (a) や (b) のような表現は不適格になるところであろうが、ここで適確性が保証されているのは走査上の要因が優先しているからに他ならない。Langacker (1993) 自身は「連続性」という用語こそ明示的に用いてはいないが、本節での議論の流れから見ると、このようなメカニズムに関して連続性という類像的な特性が言語表現を統語的に支えているということができるとであろう。

6 結 語

本稿では、類像性が文法のレベルに反映されていることを例証してきた。特に、線条性、遠近性、同型性、連続性に範囲を限って考察をすすめ、言語記号と概念あるいは経験との結びつきがランダムではなく、その対応には法則性や傾向が見られることを指摘した。類像性は人間の理解にとって本質的であるうえに、幾つかの現象においては統語的な側面を支えていることから、文法の構成原理の重要

な位置を占めていると言える。最後に、言語構造と概念構造との対応が類像的であるという観点に立つことによって、初めて言語構造の構成原理と他の認知機構との整合性を求めることができることを強調しておきたい。

註

- (1) もっとも、Sassure 自身は記号の相対的な有縁性については認めており、その役割について「記号の集合のある部分に秩序および規則性の原理を引き入れてくれる」(Sassure 1916: 小林 訳 p. 184) と述べている。
- (2) 類像性に基づいた分析については、例えば、Haiman (1980, 1983, 1985) や大堀 (1991, 1992a, 1992c) などを参照。
- (3) ページ数は邦訳書による。
- (4) さらに、(a) では動作者である「雅子さん」が次第にぼかされて、(c) では場所的に扱われていることにも注目されたい。動作者の脱焦点化 (agent-defocusing) については、Shibatani (1985) を参照。
- (5) Haiman (1985a: 131) によれば、ネケオ語では所有者と被所有物の遠近関係 (譲渡の可能性) が形式間の遠近関係に反映される。
- (6) McKay (1988) によれば、オーストラリアのレンバルンガ語 (Rembarrunga) では、同一の接辞が従属節に付されて、条件、時間的・場所的背景、理由などを表すという。
- (7) 図式的な類像性を決定する一般的要因として Haiman (1985a) は「対称性 (symmetry)」と「遠近性 (remoteness)」を挙げているが、これに「連続性」という特性が加えられうることを示唆したのは、大堀 (1992: 88) である。本節での議論は「連続性」という新しい概念に関して、「実際の可能性を探る意味をもつ。
- (8) 「心的イメージ」は「イメージ (image)」ないし「心象 (imagery)」ともいう。注意すべきは、これが単なる頭の中の画像でもなければ対象のコピーでもないという点である。大島編 (1986: 76-79) によれば“資格という解釈機構を経て知識に貯蔵された抽象的データを感覚様相に依存した形態で再現したもの”ということになる。
- (9) この例は菅井 (1992: 34) から引用した。
- (10) 認知文法では“意味の構築”を「概念化 (conceptualization)」と呼ぶが、平明に言ってしまうと“捉え方”と考えれば十分であろう。

参 考 文 献

- 池上嘉彦 1975『意味論』大修館店。
- 池上嘉彦 1980～81「Activity-Accomplishment-Achievement: 動詞意味構造の類型」『英語青年』1980年12月～1981年3月。
- 池上嘉彦 1981『<する>と<なる>の言語学』大修館書店。
- 池上嘉彦 1991『<英文法>を考える』筑摩書房。
- 大島 尚編 1986『認知科学』新曜社。
- 大堀俊夫 1991「文法構造の類像性——『かたち』の言語学へ」日本記号学会編『かたちとイメージの記号論（記号学研究11）』東海大学出版会。pp. 95-107。
- 大堀俊夫 1992a 「言語記号の類像性再考」日本記号学会編『ポストモダンの記号論・情報と類像』（記号学研究12）東海大学出版会。pp. 87-96。
- 大堀俊夫 1992b 「現代言語学のトピックス② “The bike is near the house. / ?? The house is near the bike.” <認知図式と構文>」『言語』1992年・6月号（第21号・第7号），pp. 82-85。
- 大堀俊夫 1992c 「イメージの言語学」『言語』1992年・11月号（第21巻・第12号），pp. 34-41。
- 神尾昭雄 1990『情報のなわ張り理論』大修館書店。
- 菅井三実 1992『日本語の構文スキーマに関する認知言語学的研究』名古屋大学修士学位論文。
- 菅井三実 1993「構文スキーマ理論序説」『人文科学研究・第22号』名古屋大学大学院文学研究科，人文科学研究編集委員会。pp. 33-50。
- 田中茂範 1987「多義語の分析：コアとプロトタイプ」『茨城大学教養部紀要19号』pp. 123-158。
- 田中茂範 1990『認知意味論——英語動詞の多義の構造——』三友社出版
- 戸田正直他 1986『認知科学入門——「知」の構造へのアプローチ』サイエンス社。
- 中右 実 1990「存在の認知文法」『文法と意味の間——国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版。
- 米盛裕二 1981『パースの記号学』勁草書房。
- Bolinger, D. 1977 *Form and Meaning*. London: Longman.
- Givón T. 1984 *Syntax: A functional-typological introduction* Vol. 1, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Givón T. 1990 *Syntax: A functional-typological introduction* Vol. 2, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Haiman, J. 1978 “Conditionals are topics.” *Language*, 54.

- Haiman, J. *The iconicity of Grammer: Isomorphism and motivation.* " *Language* 56, pp. 515–540.
- Haiman, J. 1983 "Iconic and economic motivation." *Language* 59, pp. 781–819.
- Haiman, J. 1985a *Natural Syntax*. Cambridge: Cambridge UP.
- Haiman, J. (ed.) 1985b *Iconicity in Syntax*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Lakoff, G. 1987 *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: University of Chicago Press. 『認知意味論』池上嘉彦・河上誓作ほか訳, 紀伊国屋書店.
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1980 *Metaphors We Live By*. Chicago: The Univ. of Chicago Press. 『レトリックと人生』渡部昇一・楠瀬順三・下谷和幸訳, 大修館書店.
- Langacker, R. W. 1993 "Reference-point constructions," *Cognitive Linguistics*, Vol. 4 (1), pp. 1–38.
- McKay, G. 1988 "Figure and Ground in Rembarrrnga complex sentences," In P. Austin (ed.) *Complex Sentence Constructions in Australian Languages*. Amsterdam: John Benjamins.
- Saussure, F. de 1916 *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot 『一般言語学講義』小林英夫訳, 岩波書店.
- Sebeok, T. A. 1985 『自然と文化の記号論』池上嘉彦編訳, 勁草書房.
- Shibatani, M. 1985 "Passives And Related Construction: A Prototype Analysis," *Language*, 61 (4), pp. 821–848.
- Talmy, L. 1978b "Figure and ground in complex sentences." In J. H. Greenberg (ed.), *Universals of human language* (Vol. 4). Stanford, CA: Stanford University Press. pp. 625–649.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik 1985 *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.